大学院生と共に歩んだ20年の体験を振り返って

－修士論文作成および学会発表への支援を中心に－

藤野　文代[1)]

はじめに

筆者は近づく定年を前に，これまでの教員人生のまとめをするべく，筆をとることにした．

昭和52年から看護専門学校，看護短大，医学部保健学科での勤務後，教員人生の後半は大学院の開設に関わり，大学院生の指導を行った．それは，平成12年，群馬大学医学部保健学研究科修士課程における担当が始まりであった．同年に「昭和大学」において，「乳がん術後患者の危機回復に影響を及ぼす要因の疫学的研究」というテーマで学位を取得した．平成15年に両親の遠距離介護が始まり，実家の近くに異動希望を出し，平成16年から23年まで岡山大学に在籍，61歳で私立大学に移った．関西福祉大学大学院，横浜創英大学大学院，姫路大学大学院において大学院開設時の一員として勤務，現在に至っている．

今日までの20年間で筆者が担当した院生は20人以上であるが，そのうち12人が修了後に別表に示した15論文を学会誌や紀要に共著で発表した．修士課程は入学から修了まで最短で２年間，修了後も継続して院生に関わり，学会発表や論文投稿等の支援をしてきた．ここでは修士課程修了までとその後の学会発表等，ともに歩んだ体験を振り返って述べる．

修士課程入学から修了までの支援

それぞれの院生との関係は入学試験前の事前面接から始まる．臨床看護師や大学助手等の社会人が多く，家族や職場の理解があり，経済的身体的に問題なく，研究意欲のある人が入学してくる．１年次から修士論文の準備として，研究計画書，倫理審査申請書の作成が始まり，これらの過程は院生にとって初めての体験であり，悩みながら進めている．倫理審査で承認後はデータ収集が順調に進むように依頼する施設へ同行し，施設の紹介をすることもある．主な研究対象は表に示した論文15件のうち，がん患者が10件，家族１件，看護師４件である．昨年から新型コロナ対策として，オンライン講義等も多く，遠距離の院生には良い点もあるが，施設に出向くことが難しくなり，データ収集を延期している院生もいる．最終審査に合格するまで，全過程において担当教員としての責任を感じながら学位取得を目標に支援する．また，遠距離通学生には，東京→岡山，神奈川→姫路のように，交通費や宿泊費が授業料以外に必要となり，院生の負担も大変であり，メールやレターパックもよく活用している．また中間発表会，審査会における指摘・助言を受け止め，より良い論文になるよう支援している．

１）　姫路大学大学院　看護学研究科

論文投稿，学会発表，国際がん看護学会発表への支援

修士論文は学会等に発表し，社会的に評価を受けることが院生にとって重要と考え，修了後も継続して支援している．殆どの院生がポスター等で発表したが，その後，論文投稿して掲載されたものは別紙の12人である．論文投稿後の査読への向き合い方も支援が必要である．筆者らの所属学会において，日本緩和医療学会，日本がん看護学会，ヒューマンケア研究学会を中心に修士論文の一部を投稿した．エントリーからポスターの作成などメールでやり取りし，指定された条件にそって完成まで支援してきた．学術集会には各勤務地から集まり，東京，千葉，横浜，名古屋，大阪，神戸，赤穂，福岡会場等に出かけ，それまでの苦労を忘れ，夜は楽しい時間を過ごした思い出もある．

国際がん看護学会は２年に１回開催されていて，筆者らは４回発表し，第13回シドニー会場へは院生も同行して発表した．平成10年の国際がん看護学会はイスラエル（第10回）で開催され，テロが心配で参加人数は少なかったが，死海観光も楽しめた．平成12年はオスロ（第11回），平成14年はロンドン（第12回），平成16年はシドニー（第13回）で開催された．その後は介護生活等のため海外へは行けなくなった．

がんプロフェッショナル育成（がん看護専門看護師）について

平成19年がん対策推進基本計画が始まり，その一環としてがんプロフェッショナル育成つまり，がん看護専門看護師（Certified Nurse Specialist以下CNS）の教育が看護系大学院で開始された．平成20年には岡山大学保健学研究科看護学専攻修士課程CNSコースの開設が認可され，筆者も担当した．担当院生２人は修士論文の一部をヒューマンケア研究学会に投稿し（表9.10論文）掲載された．このコースは 臨床実習の単位が必修科目であり修士論文が選択科目である中，論文をまとめることは院生にとって大変な努力が必要であり，２人は現在もがん看護CNSとして活躍している．また，すでに認定看護師資格CN（Certified Nurse 緩和ケア，化学療法，糖尿病看護）をもち活躍している院生も担当してきた．これらの院生と看護の現状・課題についてディスカッションし，共に考え学び合うことは看護師教育者としての喜びである．

最後に，今回，人生後半の一時期を大学院生と共に活動した20年を振り返って述べた．３年前に姫路大学大学院博士後期課程が開設され，本誌が発刊される令和４年３月には博士後期課程は完成年度を迎える．筆者が在任中に在籍している院生が無事に学位を取得することを願う．今後，姫路大学大学院看護学研究科のさらなる発展を祈念して筆を置く．

表１　掲載された修士論文

	雑誌名・発行年	著　者	タイトル
1	平成15年３月 群馬保健学紀要 23巻　55-62	廣瀬規代美 布施　祐子 藤野　文代	喉頭摘出患者の失声の受け入れに関する検討 －POMS・SEの分析から－
2	平成16年３月 群馬保健学紀要 24巻　23-33	廣瀬規代美 藤野　文代	喉頭摘出患者の喉頭摘出術の自己決定のプロセスにおける看護援助
3	平成17年12月 岡山大学医学部 保健学科紀要 16巻１号　31-38	越塚　君江 神田　清子 藤野　文代	女性生殖器がん患者の家族への思いとそれに対する看護援助
4	平成18年３月 群馬保健学紀要 26巻　51-59	越塚　君江 藤野　文代 石田　和子 神田　清子	女性生殖器がん患者の家族内役割への思いとそれに対する看護援助
5	平成20年２月 Kitakanto.M.J 55巻１号　17-26	佐藤　愛美　金子有紀子 金子　昌子　藤野　文代 小板橋喜久代	顔貌の変化をきたした口腔がん術後における退院後の生活実態
6	平成21年２月 Kitakanto.M.J 59巻１号　15-24	萩原　英子 藤野　文代 二渡　玉江	乳がん患者のボディ・イメージの変容と感情状態の関連
7	平成21年11月 群馬パース大学紀要 ８号　３-13	萩原　英子 藤野　文代 二渡　玉江	乳がん患者のボディ・イメージの変容に影響する要因
8	平成22年８月 Kitakanto.M.J 60巻３　235-241	茂木　寿江 大山ちあき 藤野　文代 神田　清子	子供をもつ乳がん患者が抱く希望
9	平成24年３月 ヒューマンケア研究学会誌 ３巻１号　17-24	竹内抄輿子 藤野　文代	外来化学療法を受けているがん患者の家族の体験
10	平成25年９月 ヒューマンケア研究学会誌 ５巻１号　９-17	森川　華恵 藤野　文代	初発乳がん手術後に補助内分泌療法を受けた閉経後患者の体験世界
11	平成27年３月 ヒューマンケア研究学会誌 ７巻２号　27-34	石井　　薫 藤野　文代 木村美智子 掛橋千賀子	長期入院中の統合失調症患者の自己決定を支援する看護
12	平成28年９月 ヒューマンケア研究学会誌 ８巻１号　29-35	岡本　華枝 藤野　文代	介護保健施設における看護師向け急変対応教育開発のための基礎的研究
13	平成28年９月 ヒューマンケア研究学会誌 ８巻１号　86-90	山岡八千代 藤野　文代	精神科病院の急性期高齢精神患者への行動制限に関する看護師の体験
14	令和２年３月 姫路大学大学院 看護学研究科論究 ３号　67-76	菊地　友紀 藤野　文代	２型糖尿病にがんを併発しがん化学療法を行っている患者の体験
15	令和３年３月 姫路大学大学院 看護学研究科論究 ４号　57-69	小川　美枝 菊地　友紀 藤野　文代	介護老人保健施設における利用者への看護師および介護福祉士の生きがい支援の体験